

日本のリバイバルのためのクリスチャンジャーナル

ハザ

2024

June

6

NO. 347

¥795

特集 届く宣教

異邦人には異邦人のように — コモリコウゾウ

福音の本質を変えずに、

現地の文化を貫いて福音を伝える — 大田祐作

カイロスの時を買い戻せ — 大東いづみ

新連載 こんな私でも救われた1 — 桜井知主夫

ハーフ牧師がゆく — 砂川竜一

拡散した「慰安婦」プロパガンダと「謝罪外交」解放宣言！ — 藤林イザヤ

私たちが直面する敵6 魔術の性質 — デレク・プリンス

エリヤの霊と力で立ち上がる マントを拾い上げよ

— ピーター・ツカヒラ

サバイバルとリバイバルの備え — 富田慎悟

時代を駆けめぐる聖霊（後編） — 奥山望



こんな私でも救われた 1

ジーザスコミュニティー国分寺牧師

桜井知主夫

聖書の詩篇には次のように書いてあります。

「愚か者は、自分のそむきの道のため、また、その咎のために悩んだ。彼らのたましいは、あらゆる食物を忌みきらい、彼らは死の門にまで着いていた。この苦しみのとき、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された。彼らは主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。彼らは、感謝のいけにえをささげ、喜び叫びながら主のみわざを語れ。」（詩編一〇七・17～22）

ここには、私のような愚か者が、自分の犯した罪を負いきれず、神に叫んだと書いてあります。その叫びに対して、神はどうしたのでしょうか。彼らを苦悩から救い出し、癒やしてくださいとあります。主の恵みとは、本当はふさわしくない、取るに足らない、釣り合わない、良くしてもらえない、できない、そんな価なき者に、祝福が与

えられるということです。

それは、まさに私の人生に起こったことです。この証しを通して、この愚か者に神がどのように恵みを注いでくださったのかを分かち合いたいと思います。

神に捧げられた赤ちゃん

私は、東京の荻窪にある衛生病院で産まれました。その日はちょうど日曜日で、桜が散っていたそうです。母はクリスチャンで、聖書に「最初に自分の胎を開く子どもは主のもの」と書かれていることを知っていました。そして、まだ私が胎内にいる時に「この赤ちゃんをあなたに捧げます」と祈ったのです。私がそれを知ったのは、牧者になって二〇年以上も過ぎてからでした。しかし、私の人生はこのような祈りから始まっていたのです。愚かな歩みをしてきた私の人生は、産まれる前からすでに神に捧げられていたのです。

一九七〇年頃、私が小学生の時です。父は国立大学で情報科学を教えていました

が、文部省からの派遣でアメリカのフィラデルフィアに家族で移住することになりました。一ドル三六〇円の時代です。為替の影響で、どれだけ円があっても、私たち一家は「貧乏」で何も買えませんでした。しかし、現地の教会からいただいて、家具をはじめ生活に必要なものは一通りそろえることができました。自転車を買ってもらえなかったので、大家さんの家で芝刈りをしてその対価として自転車を貸してもらったこともあります。政府からの派遣といっても、今の企業の駐在の人たちのような余裕のある生活はできなかったのです。

女性は大きなお屋敷に住んでいました。

これもやはり、私が牧者になってからずっと後に聞いたことなのですが、私が十二歳の時、その女性は私を指差し「あの子は将来牧師になる」と預言していたのだそうです。それを聞いた母は、私のプレッシャーになってはならないと、出産時に私を神に捧げたことと同様に、ずっと心に秘めていたのでした。

「アメリカ帰り」 鼻つまみ者になる

一年間をアメリカで過ごし、帰国するこ

ととなりました。日本に帰国したとき、私は中学生になっていました。制服を用意しなければならな

かっていたのですが、新学期ギリギリで帰国したため、準備が間に合いませんでした。そこで、私は制服が新調されるまでの一週間、当時アメリカで流行っていたヒッピー風のクエーカー教徒の女性の自宅に招かれました。クエーカー教徒とはキリスト教の宗派の一派なのですが、その

かっていたのですが、新学期ギリギリで帰国したため、準備が間に合いませんでした。そこで、私は制服が新調されるまでの一週間、当時アメリカで流行っていたヒッピー風の姿勢で登校しました。黄色いシャツを着て、黄色と茶色のストライプのパンタロンを履き、毛糸で編まれた袋を持って、地元の公立中学校へ行ったのです。

当然、不良から目をつけられて、一年間いじめられました。もちろん、黙っていいめられてばかりはいませんでした。当時、帰国子女は珍しく、周りから「アメリカ帰り」と呼ばれバカにされていました。確かに私は、アメリカ文化に感化されていました。考えたこと、思ったことをそのまま言うのがアメリカの文化ですから、私もそうしていました。クラスで一番おとなしく優しい女子からも嫌われ、最悪な一年間でした。嫌がらせで、家の門まで壊されたこともありました。

私が中学生の頃は、まだまだ古き悪しき（笑）、昭和の時代でした。学校の教師もひどかった。教師からの暴力も日常茶飯事でした。ある時、教師に注意され言い返したら、髪の毛を掴まれ、運の悪いことに、たまたま私の後ろにあった柱に頭を打ちつけられ気絶してしまいました。

中学二年生になると、さすがの私も「思っていることをそのまま言うのはまずい」と学習し、状況は少しづつ良くなってきました。友達も多く与えられました。それでも、



お祭りなどに出掛けて行つては、高校生とバットで一对一の喧嘩をしたりと、悪さはエスカレートしていきました。本当の「ツツパリ」への道突き進んでいたのです。

権威に盾突く不良学生

私を悪の道へとさらに押しやったひとつのエピソードがあります。

ある時、私は同級生を殴り、教師に呼び出されました。「なんでやったんだ」と問われ、「やりたかったから、やったんだ」と開き直って、言い返しました。その教師は、黙っていました。なぜなら、その人は、私を気絶させた当事者だったからです。何かを言い返せる立場ではありませんでした。

そこにいた二人の教師は、ただヘラヘラと笑っていました。その時です。私の内側の深いところにある何か切れたのは、「もう権威もクソもない。この教師たちもただのダサイ奴らだ」と思い、そのまま部屋を



出て行きました。これが中学三年の初めの頃です。この時から、私はますます悪い方へ落ちていきました。

中三の頃には、暴走族間の喧嘩に行きました。新聞配達用のトラックに乗って、敵対するグループを見つけボコボコにするのです。その時の血が騒ぐ感覚を忘れられず、それ以来、暴走族の集会にのめり込んでいきました。それでも高校受験に合格し、進学はしました。しかし高校へ行っても私の悪さはとどまることを知らず、午前中はパチンコへ行き、喫茶店でたむろし、午後になつてオートバイで教室に乗り付け、そして帰りに雀荘に行くという生活でした。家

庭裁判所に三回、今度何か悪さをしたら少年院に行くところまで行きました。教師の温情でなんとか高校は卒業できたものの、さすがに大学受験には失敗しました。その後も、予備校に通いながら暴走族に入りしていました。ある時、自分たちが乗っていた車が、後続の仲間を待たずに一〇〇名近い相手に喧嘩を売ったことがありました。今思えば、愚かな私を神が守られたとしか言いようがないのですが、奇跡的にかすり傷ひとつ負いませんでした。しかし、たまたま私たちの車に乗って来た裏社会の人間だけが警察に逮捕され、恨みを買うこととなり、怒りと恐怖を覚え、徐々に暴走族から距離を置くようになっていきました。

結局、遊びに遊んだツケが回って二浪し、途方に暮れていたそんな頃、伝道者であった祖父が私の人生に介入してきました。以前住んでいたフィラデルフィアにいる両親の友人の元へ行ったらどうか、と提案してきましたのです。このまま日本で予備校に通つ

ていても大学に受かる気もせず、私は再びアメリカで生活することを決めました。

悪霊に憑かれる

アメリカへ行き、紆余曲折はあったものの、最終的にはジョージア州のサバンナにある美術大学に入学することができました。私は絵と写真を専攻し、五〇〇人ほどの小さな大学の中ではありましたが、学内の「クリエイティブ賞」を三年連続で受賞したり、二年目には奨学金をもらえることになったりと、自信をつけていきました。また、プロも参加するようなコンテストで受賞するなど、積極的にアートの世界に関わるようになっていました。

大学でできた親友の名は、トーマスと言いました。トーマスの父親は外交官でしたが、彼自身は反抗的で、小鳥の頭蓋骨をイヤリングにするような、ぶっ飛んだヤツでした。彼は「ビーファイターズ」というパンクロックバンドのボーカリストでした。

あるクリスマス休暇でのことです。車で両親の友人の住むフィラデルフィアに行くことになり、その途中にあるワシントンDC近郊に帰るトーマスを同乗させていました。ワシントンDCに着き、アフリカン・クウォーターと呼ばれるアフリカ人がたくさんいる地域にあるエチオピアンレストランで、トーマスと食事をして外にでると、そこに悪魔礼拝の会堂を見つけました。アメリカには、ヨーロッパから一万人ほどの悪魔礼拝を行う司祭のような人が来ているのではないかと、言われています。彼ら

は隣に住んでいるような、いたって普通の人々です。私たちが見たものは、明らかに悪魔礼拝の会堂でした。ヤギのマークがフェンスに織り込んであったからです。パンクロッカーのトーマスは、そのような悪魔的なものをよく知っていました。それでトーマスは、その建物に興味を惹かれ、「知主夫、あそこで悪魔礼拝をしているから、一緒に見学に行かないか」と誘ってきたのです。

私は抵抗感も恐怖も何もなく、悪魔礼拝の会堂のベルを押してしまったのです。すぐには誰も出てきませんでした。三分ほどすると、ギーツとドアが開き、スーツを着た男の人が出てきたので、「見学させてください」と頼んだのですが断られ、再びギーツと音をたててドアは閉まりました。ただそれだけでした。しかしその時、すでに悪霊に取り憑かれていたとは、私には知る由もありませんでした。

